

畜産コンサルタント◇事例紹介◇

やはり粗飼料生産基盤から

上房郡北房町

Tさん(45才)は、上房郡北房町で乳牛5頭を飼っている。

北房町は高梁より北に25キロ離れた山合いの田舎まちで、高梁駅から町の中心地にゆこうと思えばバスにゆられて山越えして1時間あまりで達する。昭和28年に、旧中津井村、砦部町、上水田村、水田村が町村合併して誕生した町で、その産業構造をみると、農業が主体をなしているものの、収入額からみるとサラリーマンによるもの31パーセント、と大半を占め、農業部門では水稲21パーセント、タバコ8パーセントとなっており、畜産は僅かに2パーセントを占めているにすぎず、そのうち酪農が0・5パーセントを示しているのみである。このように、山合いの土地条件の悪いところで、これといって有利な作目がないにもかかわらず、乳牛が伸びていないのは、町とか農協の酪農に対する積極性、関係者一体となって指導体制が充分でないためともいえるし、農家自からも酪農家によるグループ活動がもたれていないし、したがって、産地形成ができていない。

『酪農主体で』

山間の村の常識のように、Tさんの耕地も、大きなもので16アールから小は2アールというように、比較的近くではあるが16枚の田にわかれている。も

っとくわしくのべると、1毛田38アール2毛田108アール、永年牧草地25アール、山林346アールを所有しており、水田108アールはこの地域では最高の部類に入る。多少の畦畔草利用はあるにしても、純然たる水田酪農といえるのである。これら耕地のうち60アールのほかは飼料作物を作付けており、その現金収入の割合をみても、酪農85パーセント、稲作13パーセント、その他2パーセントと、酪農主体の経営となっている。

『乳牛のと資質と飼養管理』

乳牛は搾乳牛のみ5頭で、そのうち3頭が高等登録牛で、能力も3頭平均乳量6970キロと優秀なものである。体型資質等もよい。これがTさんの酪農経営を支えている大黒柱である。あとの2頭は前者より2廻りぐらい質の落ちるもので、乳量も4000キロ足らずである。この2頭をなんとかして、前者に近付けて質を揃えることができれば、Tさんの経営はもともっと伸びてゆくのだろう。

また、乳牛の飼養管理労働時間をみても、1日当り4時間22分(1頭当り52分)、年間1頭当り318時間46分とまあまあである。Tさんの家族労力はTさんと奥さん(40才)の2人きりであるが、理解し合い、乳牛に愛情をもって飼っているために、牛舎

も乳牛も、大変清潔で手入れの行届いていることがわかり、気持のよい状態である。

しかしながら、ここで1番の問題となるのは繁殖成績がよくないことである。分娩間隔の長いものでは、19ヶ月にもなっている牛が

飼料作物作付状況

飼料作物名	面積	播種期	作付状況	収穫期	10a当収量	総収量
イタリアン	25a	11月		12月~6月	7,500Kg	39,000Kg
大 麦	27	9	カブ 混	5.下		
カ ブ	12	11	イタリアン混	"	3,125	6,375
トウモロコシ	10	1	カブ 間	"	2,625	
クローバー	7	8.中	イタリアン混	10.下~3.下		5,625
合 計	22	7.上	カブ 間	"		
	24	4.下~8.中		6.下~10.中		27,562
	17	4.下		8.中		
	25			年 間		9,675
合 計	169					88,237

岡山畜産便り 1965.08

いる。種付けを5回もやっており、まったく考えさせられるような数字となっている。1年1産主義を目途にすると、相当の開きができ、経営的に大きなマイナスである。その他乳牛自体については、蹄の手入れをいま少し注意する点を除いては申し分なく、周当な手入れと、無理でない搾乳（朝夕2回）によって乳牛は健康である。がいま一つ、運動場の整備がないから、これをなんとか近くに設けることが必要である。

『飼料の給与と飼料生産』

自給飼料生産計画は上表のように、イタリアン、トウモロコシ、大麦、カブを主体とした単純な組合せである。1頭当り年間給与量は生草換算で16,691キロ、1日当りでは45・7キロとなり1頭平均539キロの体重からみると少々すくない感じがする。（いずれも稲ワラを含まない）

また、濃厚飼料給与量（購入）は1頭当り年間2,028キロ（1日当り5・6キロ）を消費しており、これらを総合して養分計算した場合、その自給率（稲ワラを除く）はDCP61・5パーセント、TDN51・3パーセントといまひといきのところである。

乳牛の必要養分量に対する充足率もDCP138パーセント、TDN105パーセントといずれもオーバーしている。（5頭平均必要養分量DCP374キロ、TDN3331キロ、給与養分量、1頭当りDCPが516キロ、TDN3486キロ）がしかし、これはあくまで平均に対してであって、Tさんの牛は能力の非常に高いものと低いものがあるのであるから個別別の能力、体重による給与を考え、その量を調整してゆかないと、高能力牛に対しては無理な点がある。

また、その粗飼料の利用であるが、乾燥準備量は年間1頭当り470キロ、サイレージはサイロ4基（5×8尺）で1頭当り2525キロは準備し、あとは生草給与している。サイレージは冬期間、1カ月1基の割合で給与しており、それに稲ワラを利用しているのであるが、11月から4月までの半年間、それでも粗飼料給与量に不足をきたしているのである。そこで年間粗飼料の生産と給与の計画を立て、年間平均して十分に給与できるように工夫するはもちろん、濃厚飼料給与と併せ考える必要がある。

『経営について』

経営収支については現在では明確な判断は下せなかった。総合してみると1頭当りの所得が低いと思われる。これはとくに、2頭の低能力牛がいることと、飼料代がかかりすぎていることによるものと考えられる。経営費のうち飼料代が73パーセントをも占め、FM率も39パーセントと少々高い点から、もっと粗飼料の単位当り生産量を高め、そして計画性をもち記帳を正しく行うこと、さらに環境の整備が必要であると思う。

借入金の償還も昨年度で終了しているのだから、今後粗飼料生産基盤を確立し、その上で多頭化酪農としての立派な経営にと段階的改善をやってもらいたい。